

FL-SALC 初修外国語チャット online?
(フランス語・ドイツ語での試み 2020 年度)
FL-SALC Foreign Language Chats Online?
(German and French Chats in FL-SALC in the Academic Year 2020)

ホップ・アンニャ 駒形 千夏
HOPF Anja and KOMAGATA Chinatsu

What can teachers do to support students' autonomous learning of foreign languages in a situation where cross-border mobility is restricted? In this paper, we will discuss our observations of oral communications between learners and native speakers of the target language (L2) in so-called 'foreign language chats', a program, which has been going on since 2012 as an extracurricular activity at Niigata University. We will further analyse how we have developed this as an online activity, documenting its history and progress, in investigating the reactions of student participants. As studying abroad is still an important factor in motivating students to learn a foreign language, even if the total number of participants decreases due to difficult circumstances like the current pandemic, the authors found that continuing this activity online still has a lot of significance.

キーワード: 外国語学習、自立学習オンライン、Emergency Remote Teaching (ERT)、留学生

Keywords: Foreign Language Education, Autonomous Learning Online, Emergency Remote Teaching (ERT), Foreign Students

1. はじめに

新潟大学での初修外国語教育自立学習サポートとして、2012 年からの「FL-SALC mini」というテスト段階を経て、2013 年 4 月に改築した図書館内に設置された FL-SALC (Foreign Language Self Access Learning Center) にて、初修外国語チャットは英語チャットと並んで 2019 年度まで継続してきた試み¹である。留学生がチューターになり、自分のネイティブランゲージを目標言語とする学生と会話練習するプログラムであり、課外活動として位置付

¹ FL-SALC 内の初修外国語チャットについては次の報告を参照: Hopf & Komagata (2015) p.19

けられ、外国語習得のための自立学習を支援するものである。学習者は留学前のレベルアップや留学後のレベル維持、または国際交流など様々な動機により参加していることが見えてきた²。また留学生たちも初修外国語チューターになることで、友達関係が構築され、同じ世代の友人をえることができるこの取り組みを好意的に評価しておりデメリットは見受けられない。初修外国語チャットには 2016 年前期から 2019 年の後期まで初修外国語チャット全体で 2450 名の参加があり、ドイツ語チャットは 520 名のドイツ語学習者、フランス語チャットには 394 名のフランス語学習者が利用した³。この自立学習のサポートとしての初修外国語チャットはしっかりと新潟大学の外国語学習者の中に定着していると言えるのではないだろうか。

授業外での外国語学習支援の試みは多様な教育機関で取り組まれている。渡慶次ほか (2017) は、英語スピーキング練習を目的として授業外に個別学習としてオンライン英会話を利用した実践である。大学 2 年次生を対象に、民間会社が提供するオンライン英会話プログラムにて英語母語話者あるいは母語話者相当の講師と 1 対 1 のセッションを受講させてその教育的効果を測るものである。また武田 (2020) は、上級生が 1 年次生をサポートする英語運用能力向上のための自立的学習体制を整えて実践した報告である。短期留学が必修の外国語学科 1 年次生 82 名を対象に、留学経験のある上級生 5 名 (春学期) ないし 8 名 (秋学期) が授業時間外に 1 対 1 での英会話セッションを行ったものである。学生だけでなく、非母語話者教員同士の取り組みも報告されている。岡本・杉島 (2020) はインドネシアの高等学校で日本語を教える非母語話者教員を対象に行われたオンライン日本語会話を報告するものである。日本語による「社会的なコミュニケーション」を実践することで、非母語話者教員の日本語会話力を維持・向上するための場づくりを目的としている。

2020 年の年明けから世界的な新型コロナウイルスの拡大により日本の教育現場にも大きな影響が出ている。感染防止のため、新潟大学も 2020 年 4 月から対面授業を非対面授業に切り替えねばならず、学習者にも教員にも様々な困難を引き起こし、その状況は現在も続いている。留学に関しても受け入れ・送り出しの双方に一旦ストップがかかってしまった。初修外国語チャットは 2020 年度の第 1 タームでは対面式で開催することができなくなってしまった。

感染症の広がり阻止するため学業の大半がオンラインになってしまった非常事態ではあるが、初修外国語学習の自立学習の機会を確保するために教員たちは何ができるだろうか? 本稿は 2020 年度それぞれ初めてのオンライン開催となった第 1 学期第 2 タームの

² 詳細は同論文、pp. 35-37 を参照。

³ 参考資料 5.1.表 1 を参照。

ドイツ語チャット、そして第2学期第4タームに開催したフランス語チャットを記録し考察するものである。本章に続き、第2章でドイツ語チャット、第3章でフランス語チャットを報告し、第4章ではまとめと展望を述べる。ドイツ語とフランス語で異なる調査方法を採用しているが参加者が少ないこと、また開催回数も多くないことから数量的なデータは手に入らなかった。その代わりにチューターを含め、参加者たちの印象を書面のアンケート（ドイツ語チャット）、インタビューとアンケート（フランス語チャット）という観察的な方法をとった。本稿執筆分担はドイツ語チャットの報告はホップ、フランス語の取り組みは駒形、そのほかは共同で執筆した。

2. ドイツ語チャット実践

2020年の4月に新潟大学の授業形態は非対面授業に切り替えた時点、ドイツ語チャットのフェイスとフェイス開催は完全に諦めた。そこで2019年のドイツ語チャットも授業内のチューター⁴にも務めてくれた一人の留学生からの問い合わせがあり、オンラインでもいのでチャット開催をできないのかというのは発想転換になった。FL-SALC 担当の補佐の方、また教員の方と数回相談した結果、トライアルとして非対面の初修外国語授業と同じくリアルタイムビデオ会議を使用して、ドイツ語チャットをオンライン開催として企画した。チューター2名で週2回に第1学期の第2タームからドイツ語チャットを実施することができるようになった。留学生は新潟大学のメールアドレスを使って、使用するソフトのzoom上の連続会議を作ってもらい、自宅からチャットを開催してくれた。

2.1. 実施方法

オンラインでドイツ語チャット開催は初めての試みであったため、授業で学生に声をかけ、参加者を集めた。安全を確認するため、完全登録制にし、定員10人にしておいた。FL-SALC 経由で登録した学生のみにzoom招待状とパスワードを学務情報システム経由で通知し、後は参加するかどうかは参加者本人の判断や都合に任せた。

2.2. 実施状況

ドイツ語チャットは第2タームのみで実現できて、ターゲットであるドイツ語学習者たち(2年生以上)の時間割上の都合に考慮し、水曜日と木曜日の5時限目内に16時30～17時30に企画した。全部で合計14回を開催した。全回の参加者数⁵は、のべ22名に上がり、水曜日のほうが木曜日よりも参加者が若干多く見られた。リピーターが多く、全体の平均

⁴ 新潟大学の授業内初修外国語チューター制度は次の報告書を参照：ホップ・駒形（2014）pp.29-52

⁵ 資料5.2表2を参考。

では約 1.5 名の参加者になり、やはり対面式開催よりも参加者が少なかった⁶。今回は事前の参加者登録が必要であったため、チャット前に登録した学生数は合わせて 6 人がいた。そのためにレベル分けを設定し、水曜日は初心向けで (2 年生、ドイツ語圏留学希望者)、木曜日は上級者向け (3 年生以上、留学経験あり) で開催した。オンラインで開催したため、チューター各 1 名に担当してもらい、時間も 60 分で短めに設定した。

また参加希望のドイツ語学習者のみには zoom 招待状およびパスワードを学務情報システム経由で通知された⁷。ずっとモニターの前にいる状態も不自然であるため、60 分の制限をかけて開催した。

ドイツ語チャットの内容のデザインは、担当チューターたちと参加者に任せたのだが、開催中たまに教員として顔を出す程度に参加した。担当した留学生二人とも日本語のレベルが高く、また 2019 年の後期での授業内チューターやチャット担当のチューター経験も生かしてもらい、企画の時点から問題なく丁寧なおかつスムーズでドイツ語チャットの開催に繋がった。助言及びアドバイスはいつも通りにしたが、あまり必要ではなかったようであった。ドイツ語チャット終了後に zoom で保存可能なチャットのテキストファイルおよびチャットの内容、参加者名数、使用言語割合などについての各回、報告をメールで送ってくれた。

2.3. 参加者の反応

「はじめに」に述べたように 2020 年度の第 1 学期第 2 タームのチャットが終わった時点で、ドイツ語チャットの参加者達にフィードバックをお願いした。その時点では 2 人が自由な形でチャット体験の印象を教えてくれた。それに加えてこの研究ノートに当たって、2021 年 1 月にさらにアンケートを作成し、参加してみた印象などを聞いてみた。そのアンケートは 6 人の内に 4 名が記入してくれた。参加者全員からのフィードバックが得られた。その結果はここで簡単にまとめる。

質問 1 は参加の動機について聞いてみた。質問 2 は参加の詳細について、ドイツ語チャットオンラインの参加回数 (質問 2.1.)、良かったこと (質問 2.2.)、難しかったこと (質問 2.3.)、対面式のドイツ語チャットで参加した経験がある場合、オンラインとの違い (質問 2.4.)、ドイツ語チャットはまたオンラインで開催したら、参加したいかどうか (質問 2.5.) を聞いた。質問 3 は運営 (事前登録) について、質問 4 その他のコメントなどという構成になっている⁸。

⁶ 同じ 2019 年前期第 2 タームで対面開催した週 2 回で 16 回開催した中には 28 名の参加者で、平均 1.75 名で、やはりオンライン開催よりわずかに多く見られた。

⁷ この場を借りて、FL-SALC の担当の方の素晴らしいご協力に感謝を述べたい。

⁸ ドイツ語チャットのアンケート結果は資料 5.3 を参考。

ドイツ語チャットオンラインの参加動機について全員がドイツ語を実際に話してみたいと答えていた（質問 1）。質問 2.1.参加回数については全員の情報が得られなかったため、ここで省くことにする。ドイツ語チャットオンラインの良かったこと（質問 2.2）としてはチャット機能を使って単語やスペルがすぐに確認できる（3 名）、移動がなく気楽に参加できる（3 名）、画面共有できる機能は便利（2 名）、入退室は簡単（1 名）という回答を得た。1 人はあまりやりやすいと感じられずにいた。ドイツ語チャットオンラインでは難しかったことについて（質問 2.3）の一番多い回答は通信環境がうまくいかない時についてであった。Zoom あるいは通信環境のトラブルの場合、会話がスムーズにできない（5 名）の他に表情やボディランゲージが顔を全部見えないため会話することは難しく感じる（2 名）、また画面が一つだけだから話すタイミングが難しい（1 名）、気持ちをうまく伝えない（1 名）、不安を感じた（1 名）といった結果であった。対面式とオンラインの違いについて（質問 2.4）は経験がない参加者（2 名）、焦燥感や気持ちの使いにくかったこと（1 名）、オンラインだとボディランゲージは伝わらない（1 名）という回答があった。またこれからも参加したいかという問いに対して（質問 2.4.）は 4 名が参加したいと答えた。その内 1 名は参加したいが、対面の方が良いという結果も見えた。運営について聞いたところで（質問 3）、これで良かった（1 名）、複雑に感じた（1 名）という回答を得た。その他のコメントなど（質問 4）としては 1 名がまたぜひオンラインでも留学生とのイベントに参加したいと答えた。その他に対面でのチャットが可能になっても、オンラインチャットと組み合わせることは外国語学習のハードルは下がるという意見も出た。もう 1 人の意見は特に新入生にとってはハードルが高いことで、もう少し宣伝に力を入れれば良いのではという提案もあった。

2.4. チューターの反応

チューターの 1 人から得たフィードバック⁹によると、オンラインチャットはとっても楽しくてフレンドリーな雰囲気で進められ、賑やかな意見交換ができたから大変ポジティブな経験になった。問題視しているのは画面越しの場合、直接的なインターアクション感はどうしても制限され、小さなスクリーンによってジェスチャーやボディランゲージなどは読み取りにくいということだと述べた。言語学習ゲームのような多様なアクティビティの実現も対面チャットよりもオンラインで複雑なことであった。その代りに画面共有機能やチャット機能をビデオ会議システムのメリットとして述べた。地図や写真などの画像も一緒に見ることができるから、コミュニケーションにも役に立った。動画や画像をシェアすることで発言のしやすい雰囲気にもつながった。対面チャットの完全な交換にはチャットオ

⁹ もう 1 人のチューターはチャットが終わってからすぐ、コロナ禍のために予定よりも早く飛行機の席が空き、帰国したことによってフィードバックを得ることができなかったのは大変残念な結果であった。

ンラインにならないであろうが、オンラインチャットは十分の学習者にも収穫があったはずと求めた。チューターは新しい体験ができて、新しいスキルが身についたことも大変ポジティブな項目として述べた。

2.5. 考察

上記を考察してみると、モチベーションの高い外国語学習者はオンラインでも対面でもチャットに参加することは分かった。学生から見ると今まで対面で開催したチャットをこれからも自立学習のプログラムとしてオンラインでも十分に意味があり、可能な限りで継続をしたいと考えている。チューターと参加者は実際にあえないので、使用したビデオ会議ソフトの zoom に用意されているチャット機能やモニター共有機能をうまく使えば、単語の説明、ウェブサイトや写真のシェアなどは対面式開催のチャットと同じぐらいに楽しくて、勉強になったという意見があった。登録が必要であることを除いて zoom 上でも対面で行なったチャットの同点と言えるのは好きな時に参加でき、退会できるという印象がある。また開催側からの課題としては、参加者が少なかったことで、これから継続的に開催できたとしたら、もっと積極的に宣伝にかかりたいところである。2020 年度第 2 タームのドイツ語チャットオンラインは大学初の試みであったため、まだ参加者も制限され、登録手続きはより簡単にしてもいいかもしれない。参加者学生のフィードバックも毎回必ず、もっとシステムティックに求めた方がチューターにも参加者にももっと決め細かい指導と参加へのアドバイスもできると思った。ドイツ語チャットはこうやって成功で終わり、夏休み中は FL-SALC の英語チャットもオンラインで開催されるようになり、また第 2 学期第 4 タームでフランス語チャットも実現できたことは、ドイツ語チャットの大きな成果であったことと言えるだろう。

3. フランス語チャット実践

3.1. 新体制導入の経緯

フランス語チャットの成功は、チューターを務める優秀なフランス語母語話者学生の存在にかかっている。Covid-19 感染拡大防止のために国境を越える移動は禁止され、2020 年秋にフランスから来学予定の交換留学生は入国することができなかった。しかし在籍中の正規学生の中にフランス語を母語とする留学生が在学していることを人づてに知り、面談してフランス語科目授業アシスタントとともにフランス語チャットのチューターを依頼した。

チューターは確保できたので実施方法を練った。2020 年 4 月には学生をキャンパスに集めないための方針がとられていたが、6 月から徐々に対面活動も再開され、一部授業や部

活動なども大学が認めたものに限り十分な感染防止対策を行なった上で実施されるようになって第2学期を迎えた。しかし外国語科目は依然としてすべてがオンライン授業のままであり、また秋が深まるにつれて日本国内でも感染第2波と呼ばれる感染者数の増加を経験したため、初修外国語チャットを運営する教員間で話し合った結果、第2学期のフランス語チャットもオンラインで実施することに決定した。

次に参加形態を検討した。これまで附属図書館で定期的に行なっていたときには開催曜限を事前に告知し、事前予約不要で1回あたりの参加者数に上限は設けなかった。オンラインで実施するにあたり再考したのは事前予約および参加者数上限設定の有無であった。まず、事前予約をこれまで課してこなかったのは参加者の側にある参加を決めるまでの心理的障壁を取り除くためである。フランス語を学ぶ学生が一人でも多く参加できるよう、申し込みの手間を省き、思い立ったらすぐに参加できる体制を維持してきた。実施場所も本学附属図書館という開かれたところを選び、通りかかった学生がチャット参加者のなかに自分の友人を見つけて飛び入り参加するということも可能なように、フランス語の学習環境を整備するとともにチューター・参加者を問わず学生同士の繋がりを広げることも大切な目標として活動をデザインした。学生の自発的な参加決定にむけた自由度を高めるために事前予約制は導入せず、そのため1回あたりの参加者数も制限してこなかったのである。

今年度第2学期に開催するにあたり、学習機会の提供と学習者同士の繋がり促進というフランス語チャットの二大目標は当然保持されるべきものであった。しかし上述したように対面ではなくオンラインでの実施が決まったため、遠隔授業で観察されていたオンラインでの対話に特有なコミュニケーション上の違和感が懸念材料として持ち上がった。

Web アプリケーションを使ったオンライン上でのリアルタイムの言葉のやりとりには、通信速度が十分でないため微妙な時差が生まれること、加えてモニターとカメラの位置が一致しないため視線が合わないこと、さらには自己の映像を映し出すことに抵抗を感じる学生がいることなど、対面したコミュニケーションではとくに指摘されてこなかったこのような気まづさがオンライン対話で観察されている。それを解消するためには対面しているときよりも自己開示と会話への積極的な参加が求められる。母語で話しているときでも能動的なコミュニケーション行動をまだうまくとれない学生同士が集まった場合には、目標言語での対話活動はなおさら停滞するのではないかと懸念された。

さらにまた別の懸念材料も想定される。附属図書館でこれまで実施してきたフランス語チャット活動の中で、参加者ひとりあたりの発話時間はそれほど長くはない。しかしこれはチューター1名に対し複数の参加者がいるためであり、参加者ひとり当たりの発話時間が短く発話回数も少なくなるのはやむを得ない。それでも参加者が発したフランス語に関する質問に対してチューターが長々と説明を返す場面や、あるいはチューターが話題を設

定して調べてきたことを参加者はただ聞き取るだけという場面も時には観察された。こうしたことはもちろん参加者とチューターとの間にある目標言語習熟度の差が原因であるが、それと同時に、同席している同級生たちに対する遠慮、または彼らの前で間違いたくないという参加者のなかにある羞恥心の現れであろう。

対面していても同級生への遠慮や羞恥心から参加者の発話時間や発話回数が減少することがあるのに、オンラインでは上に述べた理由から発言へのハードルはさらに上がるものと危惧される。そこで、同時に参加する同級生をなくし、チューターと 1 対 1 で対話する環境を作れば、遠慮がちな学生でも伸び伸びとフランス語を使えるのではないだろうかと考えた。1 回あたりの参加者数に上限を設けることになるので事前予約制度を導入しなければならず、そのため思い立ったら予約なしですぐに参加できる体制は維持することはできない。しかしそもそも学内のオンラインミーティングは学生の安全を確保するためにアクセス情報は公開せず申し込みのあった人にだけ告知するので、参加したいのならどのみち事前連絡をしなければならない。またオンラインでやるのだから、偶然に活動場所付近を通りかかって飛び入り参加を決めるような事態はまず期待できないであろう。フランス語習得を介してそれが母語か否かを問わず人と人とを繋げていくフランス語チャットの理想実現にはこの方式では限界があるが、少なくとも学習者を母語話者に 1 対 1 で繋げることはできるだろう。学生同士の互恵的な環境の広がりよりも、学習者の運用技能向上に力点を置いたデザインを導入するに至った。

3.2. 実施方法

チューター 1 名に対し参加者 1 名までの個人セッションを実施するにあたり、まずチューターを務めるフランス語母語話者学生と話し合って実施日を 2021 年 1 月 12 日火曜日 3 限と決定した。また、1 人で参加を申し出る勇気がない学生もいるかもしれないと考え、2 人ひと組みでの応募も受け付けることとした。1 コマ 90 分を 15 分ずつに区切り 6 組までの参加者を学内メールにて募集した。応募者が 6 組を下回る場合は時間の間隔をあけて割り振り、チューターと参加者の間で会話が続けば次の参加者が来るまで最大 30 分間セッションを続けられるものとした。参加意欲はあるが当該曜限に授業があるなど予定が合わない場合には、参加希望学生とチューター双方の空き時間に新たなセッションを設定し、1 回目のセッション参加者にも再度の参加を呼びかけた。参加希望者への割振時間やアクセス情報の通知などの諸連絡、チューターとの時間調整、オンラインミーティングのために利用するウェブアプリケーションの設定・ホストはフランス語チャット運営責任者である筆者が行った。

3.3. 実施状況

最終的に 5 名の学生から参加申し込みがあった。そのうち 2 名は 1 回目から参加、ほかの学生は 1 回目には当該時刻に授業があったため新たに 1 月 21 日木曜日 2 限に、さらにまだ予定が合わない学生からの打診がきたため 1 月 25 日月曜日 2 限にも追加でセッションを設定した。2 人ひと組みでの応募はなかった。実施時間と参加者を一覧で示せば次の通りである。同じ記号は同一人物を示すものである。

2021 年 1 月 12 日火曜日 3 限	12:55 - 13:25 学生 A
	13:25 - 13:55 学生 B
2021 年 1 月 21 日木曜日 2 限	10:35 - 10:55 学生 C
	10:55 - 11:15 学生 D
2021 年 1 月 25 日月曜日 2 限	10:15 - 10:45 学生 E
	10:45 - 11:15 学生 A
	11:15 - 11:45 学生 D

2 回目に実施した際に一人当たりの持ち時間が 20 分であるのは、この 2 名の前後にそれぞれ 1 名ずつ参加者が予定されていたためチューターとの時間調整上、変則的な時間配分をとったことによる。しかし結果として前後の 2 名の参加はなかった。一人は前日にキャンセルしたいと連絡があり、もう一人はアクセスするのが遅くなりすぎたために参加しないものとホスト側で判断してオンラインセッションを閉じてしまったためである。

参加者 5 名は全て学部生であるが 1 年次生はおらず、全員が 1 年間以上のフランス語学習歴を持つ。チューターと初対面の参加者は 2 名、他の 3 名は授業や課外活動で顔を合わせたことがあったが親しく話したことはなかった。会話の内容はまったくのフリートークで、チューターが参加者に質問しつつ会話をリードする形で始まるものであった。筆者はオンラインミーディングを設定しウェブアプリケーションのホストを務めていたので、セッションの最初にチューターと参加者がオンライン上で顔を合わせる場には同席し終了時刻などの簡単な冒頭説明を行なったが、その後ウェブカメラはオンにしたままで退席し持ち時間終了を告げるまでは会話には介入していない。ただしオンラインミーディングをホストしている端末の近くにいること、何か問題があったときには呼んでくれればすぐに戻ってきて介入できることはチューターと参加者にセッションの冒頭で伝えてある。

3.4. 参加者の反応

Google Forms を利用してウェブ上にアンケートを作成し、チャット終了後に参加者にメールで URL を送り回答を依頼した。5 名に送り、5 名から回答を得た。協力に深く感謝し

たい。チャットに 2 回参加した学生もいたが、アンケートには他の学生と同様に初回が終わったあとに 1 回だけ回答してもらった。またメールアドレスは収集せず匿名で回答してもらった。

アンケートで尋ねたことは (1) 参加の目的、(2) 満足度とその理由、(3) 次回以降の参加意思の 3 点である。以下順に参加者の回答を読んでみよう。

(1) 参加の目的 記述式回答項目である。「フランス語で対話することに興味があり、将来にフランスに留学するつもりがあります」という意見が代表的なものである。短期研修か交換留学か、あるいは卒業後の進路として考えているのか、目的や期間はそれぞれでも渡仏がフランス語学習継続の大きなモチベーションになっているものと察せられる。

(2) 満足度とその理由 満足度は「期待通りだった」から「ぜんぜん期待通りじゃなかった」まで 5 段階の選択肢の中から 1 つを選んで回答してもらい、そのように選んだ理由を記述してもらった。「期待通りだった」が 3 名、「どちらかと言えば期待通りだった」が 2 名、そしてそれ以下と回答したものはなく胸を撫で下ろしたところである。「どちらかと言えば」とやや好意的に評価した参加者の意見は、「自分を試すいい機会になったけれど、実際に話していて単語を聞き取れないことが多く、リスニングと単語をもっと対策して自分の言いたいことが単語だけでも出てくるようになっていれば、もっとスムーズに会話できたと思うし、有意義な時間にできたと思うから」「個別だと無駄な時間がないが、かなり上達していないと内容を考えながら話すのは難しいから」というものであった。「期待どおり」と評価した参加者からは「発音を矯正してくれた」という意見が共通して見られた。

(3) 次回以降の参加意思 「また参加したいと思いますか?」という問いに対して、参加したいかどうか、もし参加したいなら、オンラインがいいか対面がいいか、個人セッションかグループセッションか、個人セッションなら長さは 15 分がいいか 30 分がいいか、複数の選択肢の中から複数回答可として選んで答えてもらった。選択肢の文面とその選択肢を挙げた学生数は次の通りである。

- a. また参加したい。オンラインの個人ミーティングがいい。15 分間でちょうどいい 2 名
- b. また参加したい。オンラインの個人ミーティングがいいが、30 分間あるといい 4 名
- c. また参加したい。オンラインのグループミーティングで楽しくおしゃべりしたい 4 名
- d. オンラインではなく、対面なら参加したい。15 分間の個人ミーティングがいい 1 名
- e. オンラインではなく、対面なら参加したい。30 分間の個人ミーティングがいい 1 名
- f. オンラインではなく、対面なら参加したい。グループで楽しくおしゃべりしたい 3 名

g. もう参加しなくていい

0名

結果としてもっとも支持されたのが「b.」および「c.」が同数で4名の学生が選んでいる。逆にもっとも人気がなかったのが「d.」そして「e.」の2つで、これも同数で1名から選ばれている。ただしこの2つの選択肢を選んだ回答者は同一人物で「g.」以外の全ての選択肢にチェックしているので、意欲あふれる優秀な学生とは思いつつも、この学生の回答はこの項目では考察の対象からははずすこととする。なお「g.」を選んだ学生がいなかったため筆者はまたも安堵した次第である。

全ての選択肢を選んだ回答者を除いて、複数回答した選択肢の組み合わせを見ると「b.」と「c.」をともに選んでいる回答者が3名と最も多い。ただし残る1名は両方とも選んでいない。また(2)で満足度を尋ねた設問に「どちらかと言えば期待通りだった」と答えた2名の回答者はどちらも「f.」をチェックしている。(2)で「期待通りだった」と回答した2名の学生は2名とも「f.」を選んでいない。

3.5. チューターを務めたフランス語母語話者学生の反応

1月21日木曜日2限、2回目のセッションの折、最後に予定していた参加者を待つ間にチューターを務めている学生から話を聞いた。30分以内の個人セッションを連続して行っているが、一人ずつではなく全員を一堂に集めて実施してはどうかとの提案を受けた。どの参加者にも結局同じような質問をするのだから、合同で行えばひとつの質問から各人が意見を述べるため話題に展開があるだろうという意見である。

3.6. 考察

合計7回行われたチューターと参加者との会話を観察してまず気がつくのは、従来のグループ会話と比較して参加者ひとりあたりの発話量の圧倒的な増大である。さらに参加者が目標言語で対話することに高い習熟度を有していることもみることができる。チューターからの問いかけに対し、黙り込む参加者は一人もいなかった。上でも触れたようにチューターと参加者は全員がほぼ初めて言葉をかわす間柄であったので、話題は初対面の学生が選ぶようなもの、例えば出身地、専門科目、家族構成、目標言語を学習対象として選んだ理由や学習歴、好きな音楽や映画、余暇の過ごし方などであった。このような身近な話題では質問内容を直ちに理解し適切に回答を述べることができる参加者ばかりであった。また質問を受けるばかりでなく、参加者の方から新たな話題を設定してチューターに投げかけることのできる力量の持ち主であった。友好的な人物と身近な話題についてリラックスして目標言語で対話できる技能を備えている今回の参加者たちも、もしこれがグループ活動であったならば、発話を独占することなく他の参加者と適切に交代しながら会話を進

めていくことだろうし、チューターの方も誰か一人に発言が偏らないように気を配るであろう。また 1 対 1 だからチューターは発音矯正などの個人的な指摘もしやすいのではないかと考えられる。今回、グループセッションではなく個人セッションを選んだのは、実施環境が対面からオンラインに変わったことに対応するためのものであったが、発話訓練のための効率を考えるなら個人セッションは大いに教育効果の期待されるものと思われた。

ただし学生たちの反応を見ると、意外にも対面・オンラインともにグループセッションも支持されていることがわかる。オンライン会話のやりにくさを今回の取り組みに参加した学生たちはそれほど気にかけないのかもしれない、あるいはまた上でも引用した「個別だと無駄な時間がないが、かなり上達していないと内容を考えながら話すのは難しいから」ということに尽きるのかもしれない。馴染みのない人物との初めての対話であったので尚更そう感じたのかと想像されるが、高い目標言語運用技能を持った学生たちであるので、回数を重ねれば抵抗感も薄れるだろう。

グループセッションなら対面でもオンラインでも抵抗はないようだが、対面での個人セッションは選ばれない傾向があるようだ。この理由を考えてみると、オンラインセッションでの安全性に関する 1 人の参加者の意見を検討してみたい。オンライン上での記述式アンケート調査のほかに、筆者は後日参加者の 1 人と雑談をする機会がありオンラインセッションでの安全性の問題を話題にした。個人のプライベートな環境を繋ぐオンラインセッションで第三者の目が届かない 2 人だけの空間を作ったとき、ハラスメントが起こらないとも限らない。今回の活動デザインでは、こうしたことに巻き込まれないよう、参加者・チューター双方の身の安全にとくに配慮した。オンラインセッションのホスト役をチューターに任せず筆者が担当し、セッションの冒頭で筆者は会話には介入しないが端末のすぐ近くにいと伝えていたのはこうした危機管理のためである。しかし参加者に尋ねてみると、実際に同じ部屋の中に 2 人きりになるなら居心地の悪さを感じるかもしれないが、オンラインならもし何かあっても接続を切れば済むことだからそれほど気にしないとの回答であった。個人セッションを設定するなら対面よりも、今回のように危機管理に配慮しつつオンラインで実施する方が抵抗なく参加してもらえらるだろうかとの示唆を得た。

最後に、参加者の反応に加えて、チューターを務める学生の意見も大切にしたい。1 コマ 90 分の間に相手を代えて短時間の対話を次々とリードしなければならない業務は大きなストレスを生み出すものなのかもしれない。もちろんチューターがそのことについて不満を述べたわけではないが、チューターからみた活動のおもしろさ、モチベーションを刺激するものは本人から提案のあったようにグループセッションの方なのかもしれないと思われる。オンライン活動に見られる対話の停滞を避け、あるいは発話訓練の効率をねらった個人セッションは、それ自体は悪いものではないが、そこでチューターが「発話するロボット」のように扱われないよう、十分に気をつけなければならない。

4. まとめ

感染症拡大防止という社会状況を受けて、外国語自立学習支援制度も遠隔で実施した経緯と経過を記録した。ホップ・駒形（2014）および Hopf & Komagata（2015）でも述べたように、外国語習得のための課外活動に自発的に参加する学生には、留学によって動機づけられている者が数多く見受けられる。今年度の参加者にも同様の傾向があることが本稿により確かめられたが、参考資料にあげた表1および表2に見られるように参加総数としては大きく減少している。これは今年度の学生海外派遣が中止され、再開の見通しも不透明であることと無関係ではあるまい。さらに学内に母語話者の学生がいなければ実施することは難しい。本取り組みは母語の異なる学生同士を結ぶ互恵的な環境づくりも目的のひとつとして掲げているが、そもそも取り組み自体が留学による学生移動によって支えられているものであるとの認識を新たにした。

外国語習得の動機づけに大きく作用する留学の再開が見通せず、また対面活動が制限された状況下ではあったが、自立学習を支援する体制をオンラインで維持できた意義は大きかったのではないかと考える。まず実践することにより運営側のノウハウが臆気ながら掴めてきた。さらに総数は減ったものの意欲的な学生の存在を把握でき、またチューターとして優秀な母語話者学生の協力も得て、彼らを核として次年度へと繋げていくことができ確信を得た。オンライン実践を積み重ねていけば、対面活動が再開した後でもそれを補完するものとして小さいながらも欠かせない取り組みとして求められるようになるかもしれない。

感染症予防のため人の移動は制限されたが、オンライン実践の可能性が大きく広がったことで、学生同士の対話の可能性も国境を超えて広がりうることは容易に想定される。これからは母語が異なる者同士の互恵的ネットワークを学外にも広げるための方策を考えるべきなのだろうか？

5. 参考資料

5.1. 表 1, 2016 年～2019 年, FL-SALC 初修外国語チャット参加者数 (対面式)

年度	学期	仏語	独語	露語	中国語	朝鮮語	伊語	西語	学期 合計	年間 合計
2016	第 1 学期	43	53	36	75	119		－	326	
	第 2 学期	42	71	86	47	122		－	368	
	(合計)	(85)	(124)	(122)	(122)	(241)		－		694
2017	第 1 学期	62	66	56	40	91		10	101	
	第 2 学期	56	68	49	53	91		17	334	
	(合計)	(118)	(134)	(105)	(93)	(182)		(27)		659
2018	第 1 学期	67	62	54	62	60	12	4	321	
	第 2 学期	12	34	22	62	68		－	198	
	(合計)	(79)	(96)	(76)	(124)	(128)	(12)	(4)		519
2019	第 1 学期	－	75	95	12	59		－	241	
	第 2 学期	112	101	50	32	42		－	337	
	(合計)	(112)	(176)	(145)	(44)	(101)		－		578
	合計	394	530	448	383	652	12	31		2450

5.2. 表 1, 2020 年, FL-SALC 初修外国語チャット参加者数 (非対面式)

年度	学期	仏語	独語	合計
2020	第 1 学期	－	22	22
	第 2 学期	7	－	7
	合計			29

5.3. 資料 FL-SALC ドイツ語（非対面）参加者アンケート（2021年1月実施）

1. 動機について

zoom 上のドイツ語チャットにどうして参加しようと思いましたか？

学生 A	留学生と話してみたかった。
学生 B	ドイツ語を話す機会を増やすため。
学生 C	ドイツ語を使う機会が全然なかったので話す場が欲しい
学生 D	記述無し
学生 E	記述無し
学生 F	去年もドイツ語チャットに参加して、今年もチャットが開かれるようであれば是非参加したいと思ったから。

2. 参加について

2.1. 覚えている程度で結構ですが、何回ぐらい参加しましたか？

学生 A	3回
学生 B	5回
学生 C	3回
学生 D	記述無し
学生 E	記述無し
学生 F	5回

2.2 ドイツ語チャットのオンライン版には良かったこと、やりやすかったことは何でしたか？

学生 A	あまり感じませんでした。
学生 B	単語の確認。チャットも使いながら難しい単語もスペル教えてもらうことで単語の確認をすることができた。
学生 C	移動がなく、気軽に参加可能、入退室も簡単
学生 D	ZOOM ではすぐにチャット機能でドイツ語のつづりを教えてもらったり、インターネットで検索した画面をシェアしたりできる点がいいなと思いました。

学生 E	①図書館まで行かなくてよい②単語のスペルが分からないときは、すぐにチャットに打ってもらえる③画面共有機能を使うことで話が盛り上がることです。
学生 F	直前まで講義があっても、最初からチャットに参加することができた。

2.3. ドイツ語チャットのオンライン版には難しかったこと、苦労したことは何でしたか？

学生 A	直接その場にいないので、うまく気持ちを伝えにくいところがあった、また参加者同士の表情が読み取りにくく不安があった。
学生 B	回線が途中で止まったり、画面一つなので喋る人も一人ずつのため、会話のタイミングが難しかった。
学生 C	zoom の調子が悪い時には、話したことが聞き取りにくくなり、スムーズな会話が困難な場合もあった。
学生 D	-
学生 E	①通信環境が悪いときはまともにコミュニケーションが取れない②見える範囲が限られているため、ボディランゲージが使いづらいという点です。オンラインで特別に困ったことはありませんでした。強いて言うなら通信が不安定になり、大きなタイムラグが発生してしまったことが何度かあったことです。
学生 F	回線の具合によって発言が聞き取りにくいことがあった。

2.4. FL-SALC のドイツ語チャットに対面式で参加した経験がありますか？そうであれば、zoom 上のドイツ語チャットとどこが違いますか？どこが同じでしたか？

学生 A	パソコンの画面上のみでは上手く気持ちが伝えにくかったです。初対面の方々ばかりなので会話が上手くできないとなお焦燥感を感じた。
学生 B	経験がない
学生 C	対面式で参加したこともあり、ホワイトボードに細かく留学生の方が説明してくれたりして、ボディランゲージがついていたことがオンラインとの大きな違いだったと思う。

学生 D	私は対面で行うチャットに参加したことがないためオンラインとの比較はできません。
学生 E	記述無し
学生 F	対面チャットでは発言のタイミングが被りそうになった時に譲れたし、話しだすタイミングに困らなかった。

2.5. ドイツ語チャットのオンライン版はまた開催したら、参加したいと思っていますか？

学生 A	参加してみたいですが、やはり対面でやってみたい気持ちが強い。
学生 B	参加してみたい。
学生 C	はい、時間が合う限り参加したいなと思っています。
学生 D	記述無し
学生 E	記述無し
学生 F	参加したいです。実践的なドイツ語を使える場面を少しでも増やしたいからです。

3. 運営について

運営（事前登録）などについてどう思いましたか？

学生 A	特になし
学生 B	よかった
学生 C	登録の手続きは個人的に分かりづらと思ったが、メールのやり取りは苦ではなかったです。
学生 D	記述無し
学生 E	記述無し
学生 F	私は特に不具合を感じることはありませんでした。

4. 他にコメント、希望、気になったことなどがあればぜひ聞かせてください。

学生 A	記述無し
学生 B	記述無し
学生 C	コロナ禍でもチャットを開いてくれたことにとても感謝。また留学生と関わるイベントなどがオンラインでできたらぜひ参加したいと思っています。

学生 D	記述無し
学生 E	オンラインもとても便利だったので、今後、対面でのチャットが可能になってからも、オンラインと併用すると、外国語学習のハードルが下がると思います。
学生 F	新入生の姿が見られなかったのが、チャットに対するハードルの高さを表していたのではないかと考えています。チャットの楽しさをもっと広めて、色んな人に参加してもらえたらと思います。 話題がないときは話しにくかったので、次回参加することがあればもっと事前に話題を考えてきたり話したいことがあるときに行ったりするなど、チャットを楽しめるようになりたいです。

参考文献

- Hopf, Anja & Komagata, Chinatsu: Foreign students as tutors for 2 FL classes? - exploring some new paths in second foreign language education: 2 FL Chats in FL Salc at Niigata University, in: 『新潟大学言語文化研究』 第二十号、2015 年 8 月、pp.9-39.
- 岡本拓・杉島夏子「社会的コミュニケーションの場づくりを目指したオンライン会話会——インドネシアの高等学校における非母語話者日本語教師を対象として——」『国際交流基金日本語教育紀要』第 16 号、国際交流基金、2020 年、pp.41-50.
- 武田和恵「ピア・サポートを活用した英会話セッションを通して英語運用能力の向上を図る学習体制の構築」『言語と文化』第 32 巻、文教大学、2020 年、pp.133-141.
- 渡慶次正則・Norman Fewell・津嘉山淳子・Meghan Kuckelman「スカイプ・オンライン英会話の授業外利用の効果と課題、動機付け——M 大学英語専門中級レベル学生の事例——」『名桜大学総合研究』26、名桜大学総合研究所、2017 年、pp.9-20.
- ホップアンニャ・駒形千夏「新潟大学の初修外国語教育における初修外国語チューター制度: 受講生・留学生のフィードバックを中心に」『新潟大学言語文化研究』第十九号、2014 年 7 月、pp.29-52.